

富士小学校における教育実践・研究活動の展開

——昭和初期公立小学校の新教育実践——

学校教育学研究室 鈴木 そよ子

The Development of Educational Practices and Workshop Activities at Fuji Elementary School

—Practices in New Education in Public Schools in the 1920s—

Soyoko SUZUKI

In this paper the writer has attempted to consider the Practices of New Education in public elementary schools, by making a study of Fuji Elementary school. The writer has focused on the development of the teachers' study and teaching practices. These teachers were associated with Nippon-Shinkyoku-Kyokai and they carried out their study together with teachers from other public schools. This had an influence on their teaching practices. To illustrate this influence with a concrete example, the educational practice of a particular teacher, Yasunori Nara, is examined.

はじめに

これまで、大正期から昭和初期の第一次新教育運動とその実践の研究は、指導者の理論と訓導の実践例を主な対象とし、この検討から新教育の果たした役割と限界を論じてきた。これは、中野光『大正自由教育の研究』、海老原治善『現代日本教育実践史』、川合章『近代日本教育方法史』にも共通して見られる。

本稿は、従来のこのような視点とは異なる視点から、第一次新教育実践を検討したい。ある学校が「旧教育」から新教育へと歩み始めるには、どのようなきっかけがあったのだろうか。訓導たちはどのような問題意識を持っていたのだろうか。新教育実践を生み出すためにどのような研究活動をしたのだろうか。そして、何よりも実践の実態を明らかにする。この4点を一つの学校について見ていく。とくに、これまでの研究では見過ごされてきた公立小学校に注目する。このような視点から、校長（主事）の理論と訓導の実践例を直結させてきた従来の実践評価から一歩離れて、実践を形成していった教師集団の視点から新教育を検討する。

「一つの例」として、本稿は旧浅草区に位置した東京市富士尋常小学校（以下富士小と略す）を選んだ。当時新教育を実践した公立尋常小学校の数は、『日本新教育百年史』¹⁾によれば100校を越えるが、富士小は、このような公立の新教育実践校のセンターの役割を果たした学校であった。

第一節 新教育への契機

富士小の新教育は、上沼久之丞（うえぬまきゆうのじょう）校長のもとに集まった青年教師たちの手で創られた。上沼校長が富士小に赴任したのは1922（大正11）年で、翌年の23（大正12）年から新教育に向けた学校づくりを始めた。まず上沼自身の前史を辿りたい。

上沼自身と新教育との関わりは、前任校の旧浅草区千束尋常小学校時代から辿ることができる。上沼は千束小時代の煩悶を1936（昭和11）年に次のように述べている。

「私が明治卅年十七歳の時初めて教壇に立つてから、大正始めにかけては、ヘルバルトの五段教授法、多方興味説に没頭して、真剣に学校経営の任に当つて居た。後半期大正六、七年頃から、自己の教育生活に不満を感じ煩

悶を持つ様になった。どこか教師も児童も受動的であり、他動的の傾向があり、義務的に努力するが、歓喜的な希望に満たされない。」²⁾

上沼は出身地長野県で一時、代用教員をつとめたのち、1903(明治36)年に東京府青山師範学校を卒業し、附属小学校訓導を経て、27歳(明治41年)ですでに旧浅草区の福井小学校校長となった。³⁾「旧教育」の時代に学び、ここに活躍の場をもっていた上沼が、教師や児童の姿からこれまでの学校経営に煩悶や不満を抱き始めたのだった。

上沼は千束小学校で、日本画家川合玉堂の弟子に図画指導を依頼したり(大正7~9年)、医学者桜井恒次郎の提唱する「合理的体操」を全校で実施する(大正9~10年)という試みをした。いくつかの試みの中で特に上沼を動かしたのが、同校の杉本茂晴訓導による自由画指導⁴⁾(大正10~12年)であり、上沼は自由画教育について「臨画手本では達せられない域にまで学童の個性ののびる姿をみせつけられてから、大いに悟るところがあった。」⁵⁾と述べている。

上沼はこの頃から校長として学校経営に取り組む姿勢をかえた。自分の学校経営方針を各学級に徹底させることをやめ、職員の自主的な研究を尊重することに心を砕くようになった。杉本を始めとし、作曲活動を始めていた中山晋平(音楽)等の訓導が、各々自由研究に取り組もうとしていた。ちょうど八大教育主張講演会後で、奈良女高師附小や千葉師範附小の活動が活発になってくる時期でもあり、山本鼎の自由画運動や、鈴木三重吉の「赤い鳥」発刊の時期にもあたる。

折りしも上沼校長の転任が重なり、上沼は赴任した富士小で新教育を継承すべく、学校づくりを始めた。上沼はその出発時点を1923(大正12)年としている。1929(昭和4)年の「日本新教育学校表」⁶⁾によれば、公立学校では旧東京市本所区横川尋常小学校(大正8年から)に次ぐ取り組みだった。

第二節 東京市富士尋常小学校

上沼校長は、41歳で富士小に赴任した。富士小は、当時32学級、1800人を上回る児童数で、浅草区内16校の公立小学校のうち最大の児童数だった。区内では進学に熱心な学校であり、他区や他県からの通学児童もいた。⁷⁾

だが、1921(大正10)年の田町の大火災によって木造校舎を焼失し、児童は学年別に周囲の小学校に収容されていた。そして職員室は千束小学校に間借りしていた。上沼は着任すると間もなく、コンクリート校舎建築の準備にとりかからねばならなかった。そのために自ら関西

九州方面の小学校を視察し、職員6名も関西の小学校を視察するために派遣した。

こうして新校舎の設備は、シャワー室や水洗トイレのような近代的設備を整えたに止まらず、普通教室の前後二面に黒板を備え、全壁をコルク張りにして児童の作品掲示スペースとした。更に備品として学級毎に20枚の小黒板を用意するという工夫がみられた。⁸⁾この校舎は完成した1923(大正12)年9月1日に、関東大震災の延焼によって、骨格を残すのみとなったが、露店学習から樽を机にしてアンペラに坐わった授業へ、1924(大正13)年にはバラック教室へと徐々に整えていった。

ところで、富士小が1900(明治33)年に開校して以来、長島富秀校長(1900~1902)、中田金次郎校長(1902~1904)、富田簇次郎校長(1905~1922)時代を経て、上沼久之丞校長(1922~1943)は、第4代校長に当たる。上沼の前任者富田校長時代は17年続き、彼のもとでつとめた教師たちは大半が老教師となっていた。彼等は確固とした教育理念をもち教育の核心は子どもに対する愛情であり、新教育のそれは口先だけのもので、自分たちの方がほんとうに子供をわかっているという誇りを持っていた。⁹⁾だから彼らの理解と協力を得ることは上沼校長にとって容易なことではなかった。

このような関係にあった校長と古手の教師たちが歩み寄りきっかけをつくったのが、先に触れた関西の学校視察であったという。設備の問題に止まらず、その学校でどんな授業をしているのかを参観せずにはいられなかった。授業と不離一体のものとして校舎の設備や備品の必要性を見たのだろう。その結果が、先にみたような工夫となって現われたといえる。彼らが視察した関西一円の学校の中で、特に奈良女高師附小の学習法から刺激を受けたという。この時、従来の授業法を考え直す必要を感じたのだろう。

この視察は上沼校長にも一つの確信をもたらした。彼は言う、「此の時奈良の学習法によって幼学年にも自主的自発的な学習が実施されるものであることの確信を得た。」¹⁰⁾この視察の後、首席訓導坂本鼎三を始めとして何人かの協力者が出はじめた。

上沼校長はこの機に職員全員に呼びかけるべく、「教育信条」を発表した。1923(大正12)年1月のことである。

「(略) 現実ノ価値ヲ自ら判定スルコトニヨツテ 自他ヲ尊重シ互ニ助長助成シ 自律自由ノ人格ノ完成ニ努カシ 自我ヲ建設シ 文化ヲ創造シ 永ク文化ノ恩恵ニ浴シ 日本国民トシテ価値アル生ヲ遂ゲントス」¹¹⁾ここに、新教育に対する上沼の期待と心構えが凝縮されている。

こうして、第一歩は、希望者が得意な教科に学習法を取り入れることから始まった。国語は和光松衛・小柳美・増子菊善、童謡振付は今井ハル、修身は坂本鼎三が手がけた。

第三節 青年教師と問題意識

上沼校長は現職員の指導と同時に、青年教師を中心とする人材集めに力を注いだ。1923（大正12）年から昭和初期にかけて同校に赴任した訓導をみると、まず、千束小学校から長野師範出身の杉本茂晴（1923～1935年）が手工専科の教師として赴任した。彼は、富士小時代にラジオ放送で図工の時間を担当したり、全国を講演して歩くなど図工教育で有名な人物となっていく。

1924（大正13）年には、鳥取師範出身の谷岡市太郎（～1946年）が赴任した。彼は同郷の入沢宗寿東大助教授と富士小の縁をつくり、教育学者と訓導たちの関係づくりにつとめた。¹²⁾

また、1925（大正14）年には、秋田師範出身の奈良靖規（1925～1936年）、宮下新之助（1925～1944年）等が加わる。その後、大内甫、藤田伸七、安達勇吉等、若手が採用された。彼らは校長の方針を承知した上で、各々が新教育に対する抱負をもって赴任したのだった。

例えば奈良靖規（1898—1985年）が富士小の訓導となった経過をみると、彼は、1917（大正6）年に秋田師範学校を卒業し、6年間県内の小学校に務めたのち上京した。彼の在職中に、当時赤井米吉を尋ねてしばしば秋田を訪れていた小原国芳と知り合い、文通を重ねていた。彼等からの刺激は奈良を新教育へと向かわせ、上京することをも決意させた。1924（大正13）年に上京すると成城小学校に入ることを望んだが、様々な事情が重なり断念した。それから、東京市教育局人事課から公立の新学校として紹介されたのが富士小だった。面接の時、上沼校長は、「君を是非ほしい。秋田県が許可しなかった時は、2年でも3年でも君を待つよ。」¹³⁾と望んだという。

奈良は、当時の問題意識を次のように回想している。「大正14年富士小学校に赴任するまで、5年、6年、高等科1、2年のみを担任し、低学年の経験はない。然し私が視察したところによると、高学年になるに従って学習が無気力になる。私はここに疑問を持った。上京前、地方地区の学校巡視の研究会に於ても同様であった。活動する児童は各学級の1割未満の学童で、他は落ちこぼれであった。教師はこの1割未満の児童で授業を進めている。 (略)一握りの児童の活躍によって授業が進められているのは、全国的に共通していることのように推測した。

そして、この原因が低学年にあると考えた。全学年中、低学年の教育は『盲点』だと思った。¹⁴⁾

若い教師たちは彼ら自身の問題意識や抱負を持って集まった。彼らが互いに刺激しあうことによって、次にみるような、単なる校長の主導に止まらぬ授業実践や研究会が彼ら自身の手で展開されていった。

第四節 合科学習の公認

富士小の授業研究は、校舎が落成と同時に廃虚と化した後、露店学習から始められ、職員の研究会は夜遅くまでローソクをともして続けられた。こうして学習法を中心においた第一回公開学習指導研究会を催したのが、1925（大正14）年3月3日のことだった。授業後の「連続批評」（午後1時～7時半）について、上沼は次のように述べている。「反省すべき点が多かったと同時に、職員の研究態度や児童の自発的学習態度に努力を求め激励の讃辞もあった。全職員が自発的学習指導に対する信念を強くした著しい機会であった。売名的な公開教授だと言われたが、学習指導の発展には予期せられざる利益を受けた。職員も子供もよく伸びた。」¹⁵⁾

このような状況の中で、青年教師たちの試みが始まる。1925（大正14）年に6年を担任した奈良は、15年度に1年生担任を希望した。校長の「少くも失敗があってもよるしい、やり給え」という激励を得ての出発だった。彼は1学年6クラスの主任となり、この6クラスはともに6学年まで持ち上がることになる。奈良学級について初期の授業実践の展開をみよう。

入学当初は、集合や整列の練習に力を入れた。その後、54名の児童とともに屋上から周囲の景色をながめたり、校庭を散歩した。更に浅草観音や上野公園にまで足をのばすようになった。教室での学習は校外で見たものを絵や単語・単文で表現することから始まった。文字の一斉指導を避けて、教室の正面に貼ってある五十音表を頼りに一人ひとりが綴り、読んでも書けない字を教師に尋ねた。児童は4、5月頃のノートに次のように綴った。「ダンジュウラウ」「マツノキ」「カンノンサマニハハトガトンデ井マス」「シトガオホゼイイマス」¹⁶⁾

このように見聞きしたことをノートに綴り、絵に表現して、教室の前に出て発表し、質問を受けたり、批評しあうのが、ごく初期の学習形態だった。この頃の富士小は、校長に届け出れば、教師の判断で自由に校外に引率できたという。奈良はまず、教科書から出発するのではなく、子どもの生活体験から学習材を見い出すことを試みていたといえよう。

奈良は、「独自学習」「相互学習」という奈良女高師附小の学習形態を活かして、彼自身の工夫を織り込んだ。その第一が、校外学習を共通体験として位置づけ、この体験を基盤に独自学習を進めたこと。第二は、「観察記録」の観点から児童の表現を指導したこと。第三は、相互学習をディスカッションの場と捉えて、討論の練習を重ねたことである。

奈良の指導した学習では、校外で様々な自然や文化に触れて、自分でそれを表現することが根幹になっている。文字・数はあくまで表現の手段として習得されている。こうして奈良は、文字や数字を習い憶えることが目的になってしまい、校外学習はそれへの単なる導入にすぎないという関係を逆転させた。これが、奈良の指導した「教科書なしの学習」(合科学習)であった。

これは斬新な試みであったがゆえに周囲から、警戒された。当局のみならず、新教育に反感をもつ旧職員や浅草区の外校からの批判、あるいは専科訓導からの申し入れに気がつかいながら実践していたという。¹⁷⁾

このような状況の中で、1926(大正15)年5月末、東京市教育局長大島正徳、視学課長広田伝蔵、全視学(17名)、浅草区内各校長による抜き打ちに近い視察が行なわれた。横川小学校を視察したあとのことだった。富士小では何人か希望者を募って授業を公開した。従来の分科学習5学級と「教科書なし」の奈良学級(1年)が視察の対象となった。この時奈良は「教科書なし」では通らぬと考え「合科学習」とした。そして、批評会的になったのは、やはり「合科学習」だった。¹⁸⁾

この時の奈良学級は、「観音堂」と題した授業で、浅草観音堂付近での独自学習の成果である各々の児童の図画・文字学習・自作童謡の発表、自作童謡の自由作曲の発表という相互学習が主な内容だった。奈良の回想から授業の流れを辿ってみると、児童にとってこのような視察は初めての経験で、いつもより発言が少なく、行儀よく、声も小さめになっていた。子供の作品(文章表現)を教師が板書し、作者に読ませた後、全児童に読ませる。よいと思ったところや、文字の間違いを児童が挙手して発言する。童謡は、作者が朗読して、その後感想を尋ね児童が答える。自由作曲については、「〇〇さんがフシをつけましたから、みんなきいて下さい。」と一人ひとり呼び出して、教室のオルガンの側に立たせる。児童が「自分の作った童謡にフシをつけました。」と、教師のオルガンに併せて歌い出す。児童|拍手する。「自分の作った童謡に自分の好きなフシをつけることはよいことです。」と、教師が評する。¹⁹⁾

このような流れの授業だった。批評会では、「大人に

さえ難しいのに、子供に作曲ができるのかね、きみ。」「その歌をクラス全体には歌わせるな。」「子どもたちの言葉よりきみの言葉の方がわるい(東北弁のこと一筆者注)じゃないか、それで国語指導ができるのかね。まず、きみの言葉から直したまえ。」と、誹謗に近い批評が続くなかで、広田視学課長の最後の言葉が状況を一転させた。「奈良くん、きみは大胆だね。広い東京にきみのような教育研究家がひとりくらいいてもいい。しかし、きみに厳命する。修身と国語の教科書は使いたまえ。」²⁰⁾

この合同視察がきっかけとなって、富士小の新教育は当局から半ば公認された。そして他の学校や旧職員の陰口もなくなり、安心して実践研究にとり組めるようになったと奈良は回想している。いやそればかりではなく、上沼久之丞校長が、東京市の命を受けて欧米の教育視察に出かける校長のひとり選ばれたのだった。

この海外教育視察は後藤新平市長時代に計画されたもので、内務大臣となった後藤の後任となった永田秀次郎市長によって実施された。派遣は三回にわたり、第1回は1924(大正23)年で、誠之尋常小学校校長前田捨松、赤坂尋常小学校校長宮内与三郎が出かけた。第2回は、1925(大正14)年で、常盤尋常小学校校長斎藤金造、横川尋常小学校校長田島音次郎が選ばれた。第3回が、1926(大正15)年で、この時、上沼校長は富士見尋常小学校の津田信雄校長とともに渡欧したのだった。²¹⁾7月19日に出発して、翌年の昭和2年3月31日に帰国している。この視察は欧米の新教育に焦点をおいていたわけではない。だが選ばれた6人のうち田島、上沼、津田は新教育実践校の校長であり、欧米の新学校を選んで参観する自由があり、そして何よりも欧米のいたるところで新教育実践の盛んな頃だった。

上沼はフランスからスイスを経てイギリスに入り、北欧から南欧へ一巡して米国に渡りニューヨーク、ボストン、シカゴ、ロサンゼルス、サンフランシスコを経て、九ヶ月後帰国した。彼は1928(昭和3)年の年賀状において視察の感想と抱負を述べている。「特に中等程度の実業教育が国民生活に適切に能力に適應した方証をしてる点は 学ばねばならぬ事と存じます 学級の人員が我国の約半数である事は実に羨しく存じました」「知的に偏し画一に失した処からのがれて 全人の活動 個性の尊重を叫び 教育の実際化 生活化を唱へ 自治自発 体験創造を重ずる教育が著しく発展して参りまして(略)今後大に初等教育の発展に努力いたしたいと存じます」²²⁾上沼校長はこの視察で、新教育の方針に自信を得た。

第五節 研究会の展開

先の合同視察で認められた富士小の訓導たちは、校長が視察に渡欧していた1926（大正15）年12月4日に第2回公開学習指導研究会をもった。参観者は253名に増えている。研究会は、二時間に分けて全学級の授業を公開する「実地指導」と職員による研究発表と講演会（新教育研究者による）から構成されていた。更に批評会が加わる場合もあった。1924（大正13）年から1936（昭和11）年まで12回開催された。日程と参加人数を以下（表1）に示す。

表1 公開学習指導研究会の参加者

回	年・月・日	参加者数
1	大正14. 3. 3	70
2	" 15. 12. 4	253
3	昭和 3. 2. 18, 19	277
4	" 3. 12. 15	?
5	" 4. 11. 21	789
6	" 5. 11. 22	?
7	" 6. 11. 21	1,046
8	" 7. 11. 22	521
9	" 8. 11. 21, 22	526
10	" 9. 11. 26	532
11	" 10. 11. 16	223
12	" 11. 11. 20	328

注) 上沼久之丞『体験富士の学校経営』、『郷土』3号（1931年1月）による。

第3回以降は、富士小の職員による研究紀要『実際の理論化』を参加者に配布した。当時、何々教育の理論と実際と題した書が流行するなかで、「教室の中の教育事実の観察をすること、考察すること、これに基づき他の教育実践と比較をし、その美点長所を摂取し、自分の実践を向上させる」ことが實際家の使命と考えて『実際の理論化』と題したのだった。²³⁾ この研究会に加えて、夏休みを利用した学習研究夏季講習会も1932（昭和7）年から1935（昭和10）年まで、設けられた。²⁴⁾

これらの公開研究会に耐えうる力をつけるのは校内の研究活動の場であるが、富士小の場合、校内の研究交流の場が幾重にも組織化されていた。まず、水曜毎の職員会議は研究発表を重視し、午後2時から深夜に及ぶこともしばしばあった。地方の新教育模範校を視察することも奨励され、視察者は職員会議の場で報告することを常とした。視察校としては、奈良女高師附小を選ぶ場合が

多く、職員同士も公開学習指導研究会等の研究会で学校ぐるみの交流を続けた。

また、校内の学年別研究会、教科別研究会（合科学習も含む）では、月に一度の例会をもった。各学級の一年間の経営方針については、年度初めに各担任が詳細な経営案を提出し、職員会議で検討をした。²⁵⁾

更に、校内指導研究会をもった。これは、校内公開授業を希望する訓導が、その2、3日前に授業校時を職員室に掲示し、1、2日前に教案を全職員に配布し、全校職員が自由に参観するというものだった。放課後、批評会を行なった。この批評会は当時の職員が「職員会の研究発表以上に恐れをなした」²⁶⁾ というほどに厳格であり、かつ重視された。奈良の回想から批評会の概要をみよう。

批評会では、授業者が授業の反省をのべた後、それについての質疑応答をする。その間、校長が発言し問題点をまとめあげる。次に自由発言に移るが、ここでは「ありません」等の無言は許されず、「感心しました」と云うと、校長が「そんな発言ではいかん」と叱ることもあり、何がどこが感心したのか頭と感情を整理して発言するようにとの指導もあった。更に本日の重要問題について話し合う。特に自由教育、奈良女高師附小の学習、その他の参考をも話し、教案の教育観、題材観、展開の方法を突込んで批評する。

最後に校長が、「本日の教授の特色は……である」と核心をつく発言をする。また、「諸君の批評の中では特に〇〇君の御意見に同感だ。××君の御意見は結果のみを見たものでプロセスの尊重が大切故、考え直したらどうか」等、批評者に対しての指導もあった。²⁷⁾

当時、富士小には42名の職員がいたがこのようにして、本科の教員がほぼ全員授業をしていた。

富士小では、「合科学習」のみならず、訓導一人ひとりがテーマをもって研究を進めていた。奈良靖規の場合は、低学年合科から中高学年の中心題材学習へと展開していったが、谷岡市太郎は低学年合科から、修身の生活題材学習、算術の自作問題学習へと研究対象を広げていった。手工の専科となった杉本茂晴は合科的手工を試み、宮下新之助は児童による創作童謡を研究し、大内甫・伴安文が理科を、藤田伸七が郷土教育研究を手がけていた。更に、白井マス、石井誠が国語教育に取り組んでいた。

それぞれの歩みは、諸雑誌に掲載された論文²⁸⁾、『実際の理論化』の論文²⁹⁾、また、公開学習指導研究会の指導案³⁰⁾から辿ることができる。ここでは、これらのうち、「合科学習」の名を冠して出発した低学年「教科書なし」

の学習が、その後どのように展開したのかを検討する。

第六節 デクロリー・メソッドとの出会い

東京市教育局と視学及び区内校長の合同視察で公認された「合科学習」は、教科枠も時間割も排したまましばらく続けられた。校長が視察のため渡欧した7月以後も、奈良はこの学習の徹底を試みた。「勝手にやってみなさい」と子どもの動くままに任せてみた。ところが一週間もすると子どもたちは動かなくなってしまった。³¹⁾

「児童中心の教育の貧弱さに悩んで」³²⁾いた彼は、篠原助市に会い、「合科学習の本質は何ですか。」と尋ね、「それは郷土教育ですよ。郷土を離れて生活はない。」という返事もらった。そして、木下竹次の「合科学習は家庭教育の延長だ」という考え方、この二人に依拠しながら、もう一度低学年教育の基礎的な考え方を見直そうとしていた。しかし、手がかりになる実践はなかった。

このような行き詰まりを打開するきっかけとなったのが、上沼校長が「君の教育に似ている」と、ロンドンから送ってくれた英訳の“The Decroly Class”だった。

上沼校長は渡欧の前に雑誌『教育の世紀』に掲載された北沢種一の参観報告(1924年)や、野口授太郎が紹介した方案の概要(1925年新年号)を読み、デクロリー・メソッドに関心をもっていた。そして、アメイド女史が校長をつとめるベルギーのブラッセルにあるエルミタージュ校を参観した彼は、「学校中隅から隅まで子供が活動してゐる、教室内の子供の学習状態も非常によい。欧州で私の見た学校中最も良く児童が活動した学校であった。」³³⁾と視察日記に記している。彼は指導実例の豊富な“The Decroly Class”を手に入れて富士小に送りどけたのだ。この書は後に、同校の訓導4人が分担して翻訳し、上沼久之丞著『生活学校デクロリーの新教育法』(1931年)の主要部分として発表された。

同書によれば、デクロリーは、人間の活動に最も影響を及ぼす基本的欲求を次の4つに分かつ。

1. 食物を摂る欲求
2. 気候不順と戦う欲求
3. 危険や種々の敵から自己防衛する欲求
4. 連带的に活動し働く欲求, 楽しみ, 自己教育する要求

次に、これらの欲求を満足させるという観点から、家庭環境、学校・社会環境、動物・植物の生物環境、太陽や星を含む無生物環境を検討する。この基本的な考え方が年間学習計画に具体化される。

例えば第1学年では次のような子どもの「欲求」にみ

あった「中心興味」(Center of Interest)を選ぶ。

月	必要	中心興味
9月	児童の必要	児童
10, 11月	食べたい	果物
12月	遊ぶ	セントニコラスと彼の玩具
1, 2月	寒い	衣服
3, 4月	寒い	火
5月		花(偶発中心興味)
6月	働く	手, 足
7月		太陽(概括)

このような「中心興味」を核としたテーマ学習は、単なる入門期の指導ではなく、中高学年へと展開する。一年間通じて「単一中心興味」の問題を継続し、各環境を4つの欲求の側面から考察する。

例えば、第3学年で「働く欲求」を「単一中心興味」として、

1. 人類の運動
2. 動物の運動
3. 植物の運動
4. 鉱物界の運動
5. 社会に於ける仕事

を考察する。

児童の活動過程に注目すると、低学年から高学年の指導細案において、一貫して「観察—联想—表現」の流れを重視している。「観察」では直接経験の範囲内で扱える問題を扱う。「联想」では経験を時間的にも空間的にも結合して考える問題を扱う。「表現」では、「具体的表現」(模型製作、図画、切り抜き、器具製作など)と「抽象的表現」(読方、話方、書方、書取、自由作文など)によって、調べたことをまとめあげる。

このような過程で、日々児童のノートに目を通すことが教師の重要な日課になる。そして、一つのプログラムや「単一中心興味」の小区分が終わった時点で、作成した図表などを学級で発表し、研究した事項の価値評価をするために全員で討論の場をもつ。

奈良は、このデクロリー・メソッドと奈良女高師附小の合科学習を比べて、デクロリー・メソッドの特質が「学習内容のエンリッチメント」にあると捉えた。そして、この特質は「联想」(Association)によると見た。³⁴⁾この発見は、中・高学年を一貫して彼の授業に影響を与えているのである。

第七節 学校を越えた研究交流——日本新教育協会

デクロリー・メソッドとの出会いは、富士小の若い訓導たちの目を世界へ向けさせた。1927（昭和2）年から校内の有志が集まって、週に1回、外国の新教育に関する文献を読み進めた。

吉田惟孝『英国の新しい学校』

小川正行『独逸に於ける新教育』

米人ニアリングによるソ連教育視察報告書

Hamaide, “The Decroly Class” 等,

また、学校で取り揃えた雑誌

“The New Era”

“Progressive Education”

も用いた。³⁵⁾ 外国の新教育実践を学ぶことが、彼らの頭の中に巣くっていた教師中心の授業観を拭い去ることに役立ったのであろう。こうして自主的な研究会を続けていた彼らに、上沼校長は新教育のための協会の必要を説いた。この話を受けた若い訓導たちは学校を越えて、同じ志をもつ者を集め、会を組織することを考えたのだった。

当時、東京の公立学校では、横川小学校（1919～、田島音次郎校長）、滝野川小学校（1922～、山崎菊次郎校長）、第一亀戸小学校（1925～、斎藤栄治校長）、また浅草区内では清島小学校（1925～、中村恒作校長）、育英小学校（1926～、泉田津平校長）、浅草小学校（1926～、大西文太校長）、新堀小学校（1927～、坂本鼎三校長）、柳北小学校（1928～、小林茂校長）³⁶⁾ と新学校が増えつつあった。ここに同志を募る基盤もあった。

こうして1928（昭和3）年に発足したのが日本新教育協会で、富士小、横川小、滝野川小の訓導が主な同人となっている。会は、機関誌（『新教育』、後に『日本新教育』）³⁷⁾ の発行と、講習会、同人研究会が主な活動であった。講習会では、同人自身が講演者となって、自らの実践と研究の評価を問うた。この講習会は好評を得て、「新教育第1回夏期講習会」（1928年8月1日～5日、府立第一高女において）の後も、第2回、第3回と続き、日本新教育協会は次第に充実していった。1930（昭和5）年7月に新教育協会が設立されてから富士小は両協会を抱え込むことになり、日本新教育協会の活動は目立たなくなるが、それまでの同協会の活動は注目に値した。

『新教育』第二号を評した『教育時論』（1928年5月15日号）は、「(略) 同人が筆を揃へて実際的研究を発表して居る。本誌は菊倍判の新聞型十頁ものであるが、全紙

面に新しい生命が脈動してゐる。(略)何れも（同人—筆者注）教育実践界に於ける真摯なる研究者であり、熱力ある闘士である。今後の活躍を期待する。」³⁸⁾ と激励している。

更に、戦後、『教育時報』（1968年7月号）に、木戸若雄は「教師の研修の歴史」と題する論文を寄せているが、この中で、日本新教育協会の講習会を指して、「これまで聴かされる席にだけ座っていた小学校の教師が、ここで聴かせる壇に立ったことになる。さ細な変化のようだが、従来の講習会の性格が、ここで研究会としての色彩を帯びてきた転機として、その意義は決して軽視すべきではない。」³⁹⁾ と、評価している。

このように、日本新教育協会は、1つの学校を越えて、しかも当時の区単位・市単位の研究会とも性格が異なり、実践者の手から手へと自分の研究・実践を伝え、交流し、刺激しあう場として位置づいていた。

第八節 アソシエーション（聯想の原理）

富士小は奈良女高師附小の影響を受け、デクロリー・メソッドを学び、公立新学校の研究交流の中心となっていた。だが、「合科学習」やデクロリー・メソッドを模倣しようとしたのではない。職員の自由な研究が基盤となっていた。それゆえ一言で特徴を表現し難い。敢えて言うなら、上沼が用いた「生活学校」という言葉が妥当だろう。彼は1933（昭和8）年、『生活学校富士の教育』を出版している。更に教育方法レベルで富士小の特徴をみるならば、1つは、実践にもとづいて1年から3年までのカリキュラムをまとめあげたことであり、2つは、ドクロリー・メソッドから学んだ「アソシエーション」（聯想）に、授業展開の鍵をみいだしたことである。

奈良は、「低学年教科書なしの教育法覚え書き」（1984年）において、1926（大正15）年から1931（昭和6）年の学習の歩みを回想している。「私は初め教科書を否定した。然し、児童の歩みが大きく伸び、学習が活発になってくると、アソシエーションにより、教科書が必要となり、教科書の否定の否定となった。」⁴⁰⁾

このような学習の変化は、低学年から中高学年への授業形態の変化に対応して見られる。

低学年は、「教科書なし」を提唱していた頃にあたる。1年の時は、文字表現と絵画表現の両方から児童の数量生活が派生している。⁴¹⁾ 文字からの派生は、数字が含まれた文を相互学習でまとめて扱い、例えば「コトリガシチワキマス」（Y児）の場合、その場所、小鳥の名前、鳴き方などについて話しあうことから数え方を始めた。こ

の指導の後、児童が自分で数えたものを意識的に記録し始め、この時教師は個別に必要なに応じて数字の書き方を教えた。

1年の終わり頃、坂井と小山という児童のかいた童話がきっかけになって学級全体に広まった創作童話も学習材の一つとなり、この学習は間隔をおきながら一年間続けられた。自分の作品を全員のまえで発表し、感想や疑問や表現の仕方の問題点について討論（相互学習）をする。この相互学習は児童を刺激し、創作童話に熱心な児童が増えた。その一人が名倉正雄で、彼の処女作「どうぶつのげいと」が、第3回の童話相互学習の学習材になった（2年生の5月31日）。全文を次にあげよう。

どうぶつのげいと

ある山の中にかるわざがありました。そのげいとをする人は、どうぶつでした。そして、どうぶつのげいとがはじまりました。ねずみが こういひました。

「さあ さあ ねずみのげいとをごらんいれます。」といひました。すると がくやの中から子ねずみが出てきて 玉のりをしました。おきやくの どうぶつは 手をたたくと「すつてんころり」と おつこつてしまひました。さうすると ねずみは はづかしがつて

「まくをしめておくれよ」とどなりました。みてゐたどうぶつは「あははは」と、わらつてかへりました。

級友がこの作品について指摘したのは、人を笑わせようとしてこっけいに書いたのはよいが、美しさと玉のりの具合、即ち細部の描写をもっとよくなければよいものがないということだった。この批評を受けた名倉は更に創作をつづけ、2年生の時完成した作品56点、未完成7点に及んだ。「おやゆび雲助」に至っては、食事も忘れて書き続けるほどの没頭ぶりだった。夢中になって習作を続けた名倉は、2年2学期末から3年の4月18日までかかって、ノート3冊に及ぶ「大ぐい太郎」を書き上げた。漫遊談であり、旅行記であるこの作品を相互学習の学習材にしようと考えた奈良は、半紙22枚に印刷した。

放課後、奈良のガリ刷り作業を見ていた子どもたちは作業を手伝い、翌日（3年生の5月4日）の相互学習の時には誰云うとなく表紙のための茶ボール紙等が用意されていた。

印刷した用紙を配ると、読み始めるもの、表紙をつけるもの、表紙にデザインするもの、目次をつくるもの（原作は目次・章なし）、挿絵を画くもの、感想文を書く

もの、絵入りの童謡を添えるもの、切絵をするものなど、2時間の国語の時間を使って、一人ひとりが「大ぐい太郎」から読みとったこと、感じたことを思い思いの方法で表現した（独自学習）。次には、この作品を発表し、「大ぐい太郎」の読みとりを巡る学習となった。⁴²⁾

これらの学習は、経験を記録する学習から創作表現へと学習が広がる過程で行なわれたものだ。奈良は、児童の中から芽生えた傾向を把握し、その作品を学級全体の学習対象としている。級友の作品とその批評に刺激されて次々と生みだされる作品を、次々と学習材にすることによって授業が展開しているのである。

奈良はこのような学習からアソシエーション（聯想）をとり入れる 移行期について、「低学年教科書なしの教育法覚え書き」において、次のように述べている。「新入児童の初期における事実、事物の観察学習は、それ自体が重要な意味をもつ基礎作業であるから、聯想作用により複雑化する必要はない。然し、子供はいつまでもそれのみで満足するものではないし、事実、学習内容も貧困である。また、児童の生命の流れからみてもマンネリズムに流れ、教師は手を加え、教師の手によって児童の歩みを歪めるものともなる。いわゆる児童本位の学習にはこのような欠点がある。私はこの欠点を改善した。聯想学習をすると、児童の活動が活発になり、興味が増し、学習が生き生きとなる。」⁴³⁾

ドクローリー・メソッドにおけるアソシエーションについてはすでに述べたが、奈良自身のアソシエーション理解について触れたい。奈良は言う。「アソシエーションが時間・空間に働く。時間とは、たとえば着物の学習をした時、昔の着物はどんなものであったか、と歴史的分野に連結させていく。空間とは北海道のアイヌの着物、エスキモーの着物、中国人の着物、ヨーロッパ人の着物はどうか、と地理的なものにつながる。かくして自己の素材学習を豊かにする。これらは、直接経験に対して、絵画、スライドによる間接経験といってもよい。然し、これは教師が考えて押しつけてはならぬ。児童の内部生命が決定するものでなければならぬ。」⁴⁴⁾

奈良実践のうち、学習記録の残されている「中心題材学習」（3年から6年まで）による修身学習⁴⁵⁾に、アソシエーションの活用が見い出される。例えば、5年の1学期末から九月に行なった『水道学習』の学習展開をみたい。

この学習は、水不足を訴える新聞記事を児童が切り抜いて発表提案したことから始まった。この夏は記録的な猛暑で、東京市は水不足に悩んでいた。また、当時奈良学級は三階にあり、水を飲むために一階まで降りなければ

ばならなかった。そのため、水に対する児童の関心はよけいに高まっていた。この学習では、まずピラや新聞記事を集めて読み、校内の水道使用状況を調べる中で、必要以上の無駄使いが浮き彫りになった。児童が家庭や近所の水道の使い方に目を向けてみると、矢張り大差がない。

相互学習では、水を大切にしなければならないという主張と、なぜ無駄に使うのだろうかという疑問が出た。蛇口から流れる水は自分のものではないから使っただけ得たという考えが無駄使いのもとだという意見が出された。これに対して、水の製出される過程を観察することが大切さをわかる手掛かりになるという意見があり、貯水池見学を予定した。

夏休みあけの日曜日、奈良学級のうち25人が村山貯水池へ向かった。初めて貯水池を訪れた児童たちはその水量に圧倒された。ところが、これが30日間の飲み水に充たないと聞いて驚く。また、貯水池の役目は水を貯めておいて天日で消毒することだと知った。貯水池の水は多摩川の羽村から来て、ここから境浄水場へ送られ、そこから東京市内の本郷給水所と芝給水場に送られ、浅草には本郷給水所から給水していることも知った。

この後の相互学習では見学者が報告し、送水経路の図面化作業をした。

次の独自学習で、児童の一人宮崎は「僕はねる時水道の水がぼたんぼたんとおちていた。ねようとしてもどうも気にかゝつてしやうがなかつた。いかうとしてもやつかいで、ねようとしても気にかゝつてしやうがない。でもとめない水がへる。どつちにしようかとかんがへたが、どうしてもとめた方がいゝと思つてとめた。」と記録している。貯水池見学に続く相互学習を経て、水もれから「水がへる」ことを自覚し、これが宮崎の行為につながっていたと思われる。この記録も相互学習の学習材となった。

次に水が使われる用途をあげて、これらに従事する人々が社会生活の営みに重要な役目を果たしていることを学んだ。また、修身教科書の徳目のうち、「儉約」「公益」「衛生」「謝恩」「主婦の務」に触れて「水道学習」を終えた。

この場合、児童の日常経験や観察文を軸としながらもチラシや資料、校内の水道使用調査、村山貯水池見学、送水経路の図面化が加わるという学習の展開が見られる。ここにアソシエーションの原理が働いている。これによって、修身の教科書を使用しながらも、教科書に縛られぬ学習が形成された。

おわりに

富士小の新教育は、校長が教師の自由な研究を奨励し、若い教師集団がその場を積極的に活用することによって展開した。そして、学校を越えた研究交流の場を広げていった。本稿はこのような研究活動の中で生み出された実践を代表するものとして奈良靖規実践をみた。次に問われるのは、このような実践が研究交流の場を介してどのように伝わったのかという問題であろう。昭和初期から10年代へと続く「新教育の変容」をみる一つの鍵として考えていきたい。

(指導教官 稲垣忠彦教授)

注

- 1) 「大正期・昭和前期における日本の新学校一覧表」小原国芳編『日本新教育百年史』第二巻、玉川大学、1970年、171～180頁。
- 2) 上沼久之丞『体験富士の学校経営』明治図書、1936年、序文。
- 3) 出張一夫「曠野を招いた人々」No. 1、台東区教育研究所、1977年。
- 4) 前掲2)及び、杉本茂晴「私はかく図画学習を指導した」『小学校』48巻5号、1930年5月。研究論文は、林 曼麗「大正期自由画教育運動における杉本茂晴の図画指導」『教育方法史研究』第二集、東京大学教育学部教育方法学研究室、1984年参照。
- 5) 上沼久之丞「新教育の発足」『千束小学校五十年誌』、1961年。
- 6) 上沼久之丞編「日本新教育学校表」『教育時論』1582号、1929年5月25日、12～15頁。
- 7) 伴安丈氏(大正14～昭和21年、富士小在職)聞きとり(1981年8月16日)による。
- 8) 校舎の設計は、東京市役所編纂『東京市教育施設復興図集』1932年を参照。備品については、杉本茂晴インタビュー(1981年10月29日)、『富士小学校六十周年記念誌』による。
- 9) 奈良靖規「低学年教育法とその反省」『教育方法史研究』第二集、1984年、130頁。
- 10) 前掲2)、500頁。
- 11) 『実際の理論化』(第七輯)1933年、1頁。
- 12) 前掲2)。「講師の招聘」に関して、「これ迄に(昭和10年の時点で――筆者注)入沢宗寿、垣内松三、河合信水、千葉命吉、清水甚吾、木下竹次、稲毛詛風、横井曹一、大浦茂樹、北沢種一、吉田熊次、日田権一、赤井米吉、志垣寛、手塚岸衛、山路兵一、野口援太郎、大松庄太郎、小野正康、小林澄兄、諸先生の御指導を得たことが有力であった。」(505頁)とあるように、多くの実践者や研究者が講師として、あるいは参観のために富士小を訪れていた。
- 13) 前掲9)、131頁。
- 14) 前掲9)、132頁。
- 15) 前掲2)、502頁。
- 16) 奈良靖規「生活としての文字と新児童文芸の建設」『教育時論』1529号、1927年12月5日、17～21頁。
- 17) 前掲9)、128頁と、奈良靖規より鈴木そよ子宛私信。
- 18) 同上。
- 19) 鈴木そよ子「富士小学校の授業改造と奈良靖規の実践」

- 『教育方法史研究』第二集, 1984年, 6~7頁。
- 20) 前掲 17)。
 - 21) 木戸若雄「東京都」『日本新教育百年史』第四巻, 1969年, 395頁。
 - 22) 上沼の視察経路も年賀状による。この年賀状は, 上沼敏乃氏から提供された。
 - 23) 前掲 9), 140頁。
 - 24) これは, 奈良女高師附小の訓導と富士小の訓導が講師となり, 全国の訓導を対象とした講習会で, 1932(昭和7)年から1935(昭和10)年まで, 8月1~5日(昭和10年のみ4日まで)に行なわれた。木下主事と上沼校長は, このような機会にも両校の親交を図っていた。
 - 25) 前掲 2) 及び, 伴安丈直筆資料。
 - 26) 奈良靖規鈴木そよ子宛私信。
 - 27) 同上。
 - 28) 鈴木が調べた雑誌論文は, 「富士小学校年表・奈良靖規年譜」『教育方法史研究』第二集にまとめた。
 - 29) 『実際の理論化』第四, 五, 六, 七, 八, 九輯は, 杉本茂晴氏から提供された。コピーが東大教育学部図書室に所蔵されている。
 - 30) 1933年, 35年, 36年の公開学習指導研究会の学習指導案は杉本茂晴氏から提供された。コピーを鈴木が所蔵している。
 - 31) 奈良靖規インタビュー(聞き手・稲垣忠彦, 1973年6月24, 25, 26日)による。
 - 32) 奈良靖規「新教育の回顧」『会報』第7号, 世界教育日本協会, 1977年5月20日, 2頁。
 - 33) 上沼久之丞『生活学校デクロリーの新教育法』明治図書, 1931年, 17頁。デクロリー・メソッドに関しては, 斎藤佐和訳『デクロリー・メソッド』世界教育学選集, 明治図書, 1977年, 飯田晃三『デクロリー教育法』目黒書店, 1931年等で紹介されているが, 上沼のものは, 指導細目, 指導例の豊富さが特徴である。
 - 34) 奈良靖規「低学年教科書なしの教育法覚え書き」『教育方法史研究』第二集, 146~149, 158頁。
 - 35) 奈良靖規から鈴木そよ子宛私信。
 - 36) 前掲 6)。数字は新教育開始の年を示す。
 - 37) 機関誌は杉本茂晴氏から提供された。『新教育』第1巻第1, 4, 5号と第2巻第1号及び『日本新教育』第2巻第9号のコピーが東大教育学部図書室に所蔵されている。
 - 38) 『教育時論』1545号, 1928年5月15日, 31頁。
 - 39) 木戸若雄「教師の研修の歴史」『教育じほう』1968年7月, 26~27頁。
 - 40) 前掲 34), 147頁。
 - 41) 奈良靖規「新入生に対する新教育の諸問題」『小学校』昭和5年4月号。
 - 42) 創作童話に端を発する一連の学習は, 奈良靖規「作業による国語学習——製本学習の経過について——」『教育時論』, (一)は1548号, 1928年6月15日, (二)は, 1549号, 同年6月25日, (三)は, 1550号, 同年7月5日。
 - 43) 前掲 34), 147頁。
 - 44) 同上。
 - 45) 奈良靖規『民族理想に立つ修身教育』同文館, 1933年, に3年生から6年生(昭和3年から6年)の中心題材学習の展開が, 児童の作文も含めて記録されている。